

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	隆夫 るみ子 允孝 喜夫 芳春 うめ乃 翔太		由美子 鷹を 静香 六弦 マスミ 鶴城 翔太		曆文 稀香	允孝 京子	ことは さく子		芳春		るみ子 京子 いちい 道を 静香		曆文 雪を 道香 のぞみ 鶴城 萬蝶	夫香 隆朝	
初東風や気象を癒す美空かな	醪の息そつとうかがふ寒の蔵	寒風や七十五疊の日章旗	すれ違ふ漁夫に仄かな焚火の香	リモートで挨拶交はすお正月	追分の今泣き処冬の宿	日脚伸び己が影追う足軽し	初春や雲一つ無き父の寺	元朝の威風橙餅に載る	お地藏の赤きマスクや実南天	エアコンの繭玉飾り風にゆれ	研ぎ癖のつきし砥石や寒の入	巡り逢う地球と独楽と地球独楽	風花や過去のページは火にくべる	冬至風帽子飛ばして吹き止まず	季語がシンプルに表現されている。季語の幹旋が秀逸。
うめ乃	丸山マスミ	新 曆文	後藤允孝	本橋稀香	栢尾さく子	かげろう	石関六弦	青木鶴城	後記朝香	木村るみ子	檜鼻ことは	木村隆夫	古賀由美子	秋谷風舎	

私も過日の日記は火に焚べたい、そんな冬の時です。「風花」と過去への決別の気持ちの対比が良い。自分の過去と決別する心に風花の措辞が秀逸。過去との決別は火にくべるに限る。風花との距離感が良い。風花に過去への未練を感じるが、潔い一句。

季語と合っている。長年使ってきた砥石に対する感慨と、砥石の感触に季語の幹旋が良い。冷たさと幾度となく繰り返された温もりとのコントラストが面白い。「寒の入」の季語の幹旋が素晴らしい。季語の幹旋が素晴らしい。

お地藏様の赤いマスクに温もりとしゃれつ 気がある。時代をさりげなく切り取っているのが良い。

正月早々菩提寺に行かれたのでしょうか。いいお参りの日となりました。

自分の長くなった影を何時までも追っかける様子が良い。日脚も足も、これから明るくなるという嬉しさに溢れている。

冬の旅。宿で追分節の生演奏を聴くという贅沢さ。羨ましいです。

ドラマを感じました。いろいろな物語が始まりそうです。最近焚火をしなくなりしました。現実か空想か、映画のワンシーンの様。焚火で暖を取った漁師のやるぞという気配も感じられる。寒空に暖を取り漁に向う様子が浮かぶ。漁師が港に帰って来て、体を温めた焚火。「焚火の香」との表現がよい。

中句が良い、繋ぎ方。静かさが出ている。中七が良い。杜氏の緊張感が伝わる。冷えきつた蔵のようすや発酵の音、香りまでも伝わってくるよう。「息」の表現が臨場感を与えてくれている。中7に大事に育てる杜氏さんの職人氣質と優しさが伝わる。醪の息はそう大きくは無さそうである。「そつとうかがう」に実感がこもっている。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年一月
		風舎	ことは	吉鶴徹平 清	チアキ		隆夫 かげろう			風舎 修	るみ子			修 稀香	
友の本から半券はらり冬うらら	焚火の香箒目著るき朝の庭	二合半酒の程よく廻り初稽古 <small>こなから酒が、洒落ている。作者の稽古事の充実した一年となること 予感される。</small>	更の簿に出入り始まる四日かな <small>仕事始め、心地よい響きのある御句です。</small>	出囃子にしはぶきひとつ八五郎 <small>初席のひとコマを上手く表現している。さて、これから始まる八つあ ん、熊さんの演目は何だろう。季語の選択が絶妙。</small>	荘厳な松の立ち生け年新た <small>松の立ち生けの言葉の妙。新年に相応しい。</small>	風さけて些か甘き黄水仙	「たにがわ」の抜くるトンネル冴ゆる空	口上に笑ひ零るる猿廻し <small>トンネルを出た爽やかな情景が良い。ひらがなの「たにがわ」から上越 新幹線であると判り、「雪国」への疾走感が自分好み。</small>	捨てられし子なれどわれに粉雪の降る	早送りの録画のやうな年の暮 <small>深く抑制された表現が秀逸である。作者の前向きな人柄が、感じられ る。上五中七の比喩が上手い。</small>	雨あがる玉砂利の音伊勢参 <small>荘厳さ。</small>	妻送り里を偲ぶか寒昂	初雀日輪浴びて枝に満つ	福笑ひすればピカソのころかな <small>福笑いとピカソの取合せが秀逸。確かに福笑いの顔はピカソです。</small>	
野田静香	反町 修	正木萬蝶	小林京子	日高道を	岡田芳春	持永喜夫	近藤徹平	村杉清吉	山中いちい	保坂翔太	奥山粉雪	宮崎チアキ	望月のぞみ	鷹を	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
	由美子	由美子 いちい 徹平	風舎 六弦 萬蝶	曆文		粉雪 道を	徹平	清吉 チアキ	翔太				静香 のぞみ うめ乃 チアキ	ことは いちい 鷹を 六弦 萬蝶
独り寝に欲しいシュツカよ冬の旅	初雪や徐々に本気の雪となり 雪の風情に惹かれます。	唐突にケトル笛吹く寒厨 ケトルの音が聞こえました。冷え切った台所の暗さが見えました。張り詰めた空気を割くような鋭い音が聞こえるよう。上五の導入がよい。	年男下戸を隠しつ黒田節 「下戸を隠して」の屈託のない表現が好感される。中七の下戸が笑いを誘い、正月らしい。一見して呑めそうな男なのだろうか。豪快な黒田節が面白い。	霜柱踏みつつ老いの下り坂	ゴミ漁り寛ぐ街の寒鴉	永遠に花鳥風詠懐手 懐手がいいですね。いつまでもこのお姿で！。決意か懐疑か、「懐手」が絶妙。	しくじりで初笑いとなる猿まわし 上五の導入がよい。	花柄のお守り四つ初太鼓 初詣の情景の表現が見事である。お守りと初太鼓の対比が良い。	途絶へたる父手作りの柳箸 父の手作りの柳箸を通して、親子の情の深さを感じる。	左義長の炎におどろく森の精	賽銭箱かすめる風や去年今年	空白のページに栞初茜	そそぐ愛つぎたす夢の屠蘇の杯 お屠蘇に愛や夢を注ぐ、なんて素適なお正月。年の始めのお屠蘇を通して親子、家族の絆が良く出てる。「そそぐ愛つぎたす夢」に味わいがある。季語が生きている。	冬眠の準備か妻はよく食べる ユーモアに隠れた愛情が微笑ましい。のどかで温かな夫婦の様子がほえましい。冬でなくとも良く食べますよね。擬人化の逆の発想。愛情が感じられる。人間も動物、妻の食欲と冬眠の取り合わせがユーモラス。
鷹を	本橋稀香	丸山マズミ	新 曆文	後藤允孝	かげろう	栢尾さく子	木村るみ子	石関六弦	青木鶴城	後記朝香	秋谷風舎	檜鼻ことは	木村隆夫	古賀由美子

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	
清吉 かげろう	マスミ 朝香	うめ乃		鷹を さく子 マスミ	京子 稀香		のぞみ		允孝 喜夫 修 芳春 さく子		かげろう	粉雪		喜夫	
ひたすらに轍たどるや雪月夜 月夜の雪道を急ぐ人の情景が目には浮かびます。慣れない雪道運転のある感じが良い。	祝賀会のグラス・ハープや星冴ゆる グラス・ハープの澄んだ音。冴える星空に相応しい。上五、中七と季語の対比が良い。	二年経つ素顔忘れしマスク顔 二年もの長い間苦しめられるコロナ禍素顔忘れし 諧謔みがおもしろい！	逆風の暗夜目深に冬帽子	円陣に補欠の渡す紙懐炉 補欠が活きています。臨場感充分。チームメートの邪魔をしないよう小走りで懐炉をわたす補欠選手。早く正選手になれよ。と応援したくなる。	宝船神奈川沖は波高し 「神奈川沖浪裏」の取り合わせが凄い。リズムも良い。北斎の神奈川沖浪裏を想起する。	新年の決意薄れる十五日	精進湖浮きの動かぬ余寒かな	一瞬の日の届きたり冬座敷	道場に映ゆる白足袋弓始 弓初めに相応しい句です。映ゆる白足袋が良いですね。凜とした姿が目には浮かびます。弓始めの厳肅な雰囲気や白足袋が表現。下ろしたてなものでしよう。「白足袋」に初稽古の清々しさや緊張感、道場の冷気を感じました。	気まぐれに粉雪の舞う町の朝	初東風や関門橋を渡りをり 3つの名詞が物語を想起させ、季語との取り合わせも良い。	相席の宇治の掛け茶屋冬紅葉	枯れ葎媚びることなく生きていく これが人生、路傍の葎。	夜上がりや怪しきまでの冬紅葉 大きな景色が目には浮かびます。	望月のぞみ
小林京子	野田静香	反町 修	正木萬蝶	近藤徹平	日高道を	岡田芳春	持永喜夫	奥山粉雪	村杉清吉	山中いちい	保坂翔太	うめ乃	宮崎チアキ		